

平成二十八年度 万葉集東歌オープンセミナー

平成二十八年八月二十八日

「東歌の宝庫・古代ぐんま」

群馬県立土屋文明記念文学館

「万葉集東歌を伝える」

「東歌と写本・版本」

群馬県立女子大学 北川 和 秀

◎万葉集の原本と写本・版本

①万葉集の原本はすでに失われてしまい、今に伝わっていない。万葉集が成立した頃はまだひらがなもカタカナも発明されていないので、原本は漢字のみで書かれていたはずである。例えば歌は次のように表記されていたことであろう。

現世尔波人事繁来生尔毛将相吾背
子今不有十方

②平安時代になると、漢字ばかりの万葉集を読むのは困難になってきた。そこで、天暦五年（九五―）、村上天皇は宮中の昭陽舎（梨壺）に置いた撰和歌所の五人の寄人たちに命じて、万葉集に訓を付けさせた。この五人を「梨壺の五人」と呼ぶ。大中臣能宣、源順、清原元輔、坂上望城、紀時文といった面々である。この時に付けられた訓を古点と呼ぶ。この写本も今日には伝わっていないが、桂本万葉集はその面影を伝えるとする説がある。桂本の一首を例示する。

現世尔波人事繁来生尔毛将相吾背
子今不有十方
らあよもはひと、もろげこ、むよたえあ
けむわをこ、まれらもこや

現世尔波 人事繁 来生尔毛 将相吾背子 今不有十方 （巻四・五四一）

現世には人言繁し来む生にも逢はむわが背子今ならずとも

③以後、こうした形式の写本が作られてゆく。鎌倉中期になって仙覚という学僧が登場し、当時伝来していた万葉集の写本を多数つき合わせて校訂本文を作成する。この仙覚の手を経っていない万葉集諸本を次点本（または非仙覚本）と呼ぶ。平安時代から鎌倉時代中期までに写された写本は全て次点本であるが、鎌倉中期以降に写された写本にも次点本はある。たとえば、近年発見された廣瀬本は江戸時代の書写ながら、次点本である。次点本の多くは、原文と訓とを別行に書いている。

④仙覚は、万葉集の注釈も著している万葉学者である。精力的に万葉集の諸本を収集し、何次にも互って万葉集を校訂している。それはすぐれた業績であったので、仙覚以後は、仙覚が作成した校訂本文が広く用いられるようになった。この系統の写本を新点本（または仙覚本）と呼ぶ。新点本は、原文の脇にふりがな形式で訓を附している。

⑤江戸初期に木活字の万葉集が刊行された。原文のみで訓のない活字無訓本と、それを改訂して訓を附した活字附訓本とがある。さらに、活字附訓本を製版した寛永版本が刊行された。寛永版本は広く長く流布したが、もともと活字無訓本はあまり良い系統の本文ではないので、その流れを汲む寛永版本も善本とは言えない。

◎ 卷十四（東歌の巻）の写本

①次点本には平安時代に書写されたものが複数残っている。次の諸本である。

- ・ 桂本（平安中期）
- ・ 藍紙本（平安中期）
- ・ 元暦校本（平安中期。ただし巻六のみは鎌倉初期か）
- ・ 金沢本（平安後期）
- ・ 天治本（平安後期）
- ・ 類聚古集（平安末期）

②ただし、これらはいずれも全二十巻が完備しているわけではない。桂本は巻四しか残っていない。右の諸本のうち巻十四がまとまって残っているのは、元暦校本と類聚古集のみに過ぎない。次点本は、廣瀬本が書写年代は江戸時代まで降るが、全巻完備しており、巻十四の本文校訂に使用できる。新点本では、鎌倉後期書写の西本願寺本が書写年代も古く（仙覚からあまり時を経っていない）、最善本である。

③従って、巻十四の本文校訂にあたっては、元暦校本、類聚古集、廣瀬本、西本願寺本が主要な写本ということになる。

① 三三九 九番歌

信濃道者伊麻能波里美知可里婆祢尔安
思布麻之奈牟久都波氣和我世
志那のちやいまのそめあそこもぬ
了に志あも志らんうけなむわに

(元暦校本)

信濃道者伊麻能波里美知可里婆祢尔安
思布麻之奈牟久都波氣和我世 信濃
あふましくつはくわに

(類聚古集)

信濃道者伊麻能波里美知可里婆祢尔安思
布麻之奈牟久都波氣和我世
シノケイニハリミナカリハ子ニアリフニケツハケワセ

(廣瀬本)

信濃道者伊麻能波里美知可里婆祢尔安思
之奈牟久都波氣和我世

(西本願寺本)

* 信濃道は今の墾道刈株に足踏ましむな (踏ましなむ) 履着けわが背
※ 踏ましむな……「しむ」は使役。(馬に) 踏ませるな

踏ましなむ……「し」は尊敬、「な」は完了、「む」は推量。(あなたが) お踏みなさるでしょう

②三四〇〇番歌

信濃奈留知具麻能河泊能左射礼思母伎
伎亦之布美互波多麻等比呂波牟

志れぬ難ふちろりのつものせられ志と
すみえろんもやあまゝいんえさ

(元暦校本)

信濃奈流知具麻能河泊能左射礼思母
伎亦之布美互波多麻等比呂波牟

しなろろちもれろのせられし
よれろんあはれろいんえさ

(類聚古集)

信濃奈流知具麻能河泊能左射礼思母伎
祢之布美互波多麻等比呂波牟

(廣瀬本)

信濃奈流知具麻能河泊能左射礼思母伎亦之布
美互波多麻等比呂波牟

(西本願寺本)

*信濃なる筑摩の川の細石〔左射礼思〕も君し踏みてば玉と拾はむ

③三四〇三番歌

安我古非波麻左香毛可奈思久佐麻久良
多胡能伊利野乃於父母可奈思母
あゝいゝまゝもろつとくさうきうき
あゝいゝまゝもろつとくさうき

(元暦校本)

安我古非波麻左香毛可奈思久佐麻久良
多胡能伊利野乃於父母可奈思母
あゝいゝまゝもろつとくさうきうき
あゝいゝまゝもろつとくさうき

(類聚古集)

安我古非波麻左香毛可奈思久佐麻久良多胡
能伊利野乃於父母可奈思母
あゝいゝまゝもろつとくさうきうき
あゝいゝまゝもろつとくさうき

(廣瀬本)

安我古非波麻左香毛可奈思久佐麻久良多胡
能伊利野乃於父母可奈思母
あゝいゝまゝもろつとくさうきうき
あゝいゝまゝもろつとくさうき

(西本願寺本)

* 吾が恋は現在も悲し草枕多胡の入野の将来〔於久〕も悲しも
※ 伊香保ろの岨の榛原ねもころに将来〔於久〕をなかねそ現在し善かば (三四一〇)

④三四一八番歌

可美都氣努佐野田能奈倍能武良奈倍尔
 許登波佐太米都伊麻波伊可尔世母
 うんふふふふふふふふふふふふふふふふ
 ふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

(元暦方本)

可美都氣努佐野田能奈倍能武良奈倍尔
 許登波佐太米都伊麻波伊可尔世母
 うんふふふふふふふふふふふふふふふふ
 ふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

(類聚古集)

可美都氣努佐野田能奈倍能武良奈倍尔
 許登波佐太米都伊麻波伊可尔世母
 カミツケノサノタノナヘノウナヘニコトハサ
 ムツイニハイカヒム

(廣瀬本)

可美都氣奴佐野田能奈倍能武良奈倍尔
 許登波佐太米都伊麻波伊可尔世母
 カミツケノサノタノナヘノウナヘニコトハ
 ムツイニハイカヒム

(西本願寺本)

*上毛野佐野田の苗の占苗に事は定めつ今は如何にせも

◎西本願寺本万葉集に見える声点

*声点（しょうてん）というのはアクセント記号のこと。点の位置でアクセントの高低を示す。点の数が一点と二点と併存する場合は、一点が清音、二点が濁音。

*西本願寺本万葉集には朱墨二種類の声点が見えるが、数は多くはなく、散見される程度である。

①三四〇二番歌

比能具礼余宇須比乃夜麻乎古由流目波势奈能
我素促母佐夜余布良思都

ウ ス ヒ ノ P ニ

②三四九四番歌

兒毛知夜麻和可加敬流豆能毛羨都麻豆宿毛等
和波毛布汝波安抒可毛布

ワ カ カ ヘ ル チ ノ

③三四三三番歌（部分）

舒太流木乎

木垂る木を

④三三八六番歌（部分）

可豆思加和世乎

葛飾早稲を

⑤三三八七番歌（部分）

安能於登世受

足の音せず